

稲山会通信

№51

撮影：齊藤壮呉 OB (R4 年卒)

発行人：村田宜男 編集人：行方正幸 TEL: 043-486-0239 Mail: yukuemnamekata@gmail.com

巻頭言：山屋は技術、経験と強靱なトレーニングでつくられる

行方 正幸 (S50 年卒)

2024 年、残念なことに我が国最高のアルパインクライマーの平出和也氏と中島建郎氏が K2 西壁で遭難したことは記憶に新しいことと思います。でも、早大山の会、稲門山の会共に遭難もなく、無事に一年を過ごすことが出来たことは喜びにたえません。皆さんの安全登山の意識が高いことの証(あかし)と思っております。

でも、「山の会」ってさ所詮山に登ってなんぼの世界。一番はヒマラヤ(エベレスト)というヒエラルヒーのある世界です。ただ歩くだけのハイキングと登山は全く訳が違います。山の会はハイキングではなく、オールラウンドな登山を実践するサークルであることを忘れないでください。

何を言いたいかというと、オールラウンドな登山とは山頂を目指して、つらく時には危険なめにもあうことがあります。だから、「山の会」の登山は、真剣にやらないといけない。そのためには技術、装備、経験(戦略)、トレーニングが不可欠です。重いリュックを背負って、きちんと登山技術を身につけて何日も山に登らないとオールラウンドな山屋になれません。

昔のワセダは＝バカタ大学と言われるような素晴らしい大学で、入ってしまえば勉強などしなくても、年間百日以上山に行っても、何回海外遠征に行っても卒業させてくれました。

いまのワセダは、そんな甘い大学ではありません。文武両道で頑張ることを大学は求めています。これってとても大変なんですけど、学生諸君は山の会の基本に立ち返って、信念を持って山と学業の文武両道で汗と歓喜の涙が溢れでるような熱いワセダライフを楽しんでください。

—Contents—

- 巻頭言：行方正幸
- 特集Ⅰ：山の会総会
米山不器
- 特集Ⅱ：村田宜男
三宅辰幸
宮澤壮介
- 特集Ⅲ：2025 年山の記録
海崎真穂
齊藤壮呉
- 特別投稿：豊田紳二
Thui I 峰への挑戦
- お知らせ
- 編集後記

【特集 I : 2025 稲門山の会総会・新年会】

文責：米山不器(S54 卒)

日時： 2025 年 2 月 1 日 14:30~18:30

場所： 航空会館（港区新橋 1 丁目 JR 及び地下鉄新橋駅、地下鉄内幸町駅）

参加者： 44 名（卒業生 37 名、「山の会」会長、学生 6 名）

早稲田に集い、山を愛する仲間の絆を いつまでも
山好き仲間の心の故郷稲門山の会



第一部 総会： 議案と報告事項についての承認

【第1号議案】 事業活動報告および役員案 代表 村田宣男

1. 初めに

山の会は今年創立 69 年になり名簿上の稲山会会員は累計 370 名になりました。卒業年次別の内訳をみますと、昭和時代（1956-88）が 287 名、平成時代（1989-2018）が 56 名、令和（2019～）が 27 名+今年卒業予定と現役で 20 名となっています。平成年代は名簿記載漏れも多く会員数が少なくなっていました。近年は現役活動の活発化に合わせて会員数も順調に増加する傾向にあります。今年度の方針といたしましては、以下を中心に進めたいと考えております。ご理解下さい。

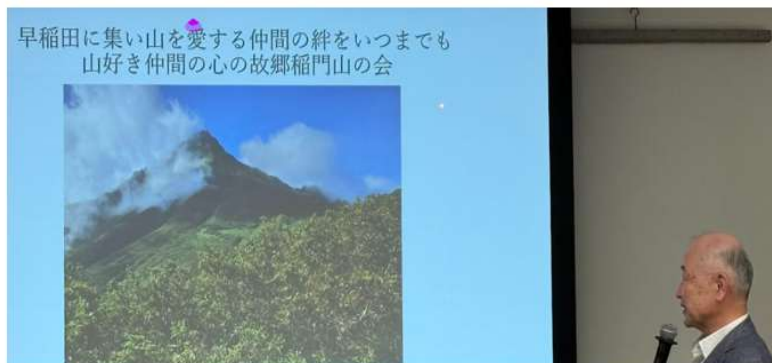


- ① 永続的な会の発展を目指し引き続き現役活動の支援し、卒業生全員の稲山会入会を促す
- ② 暫く山関連から遠ざかっていた人も何時でも帰れるよう、IT 技術も活用し情報の発信に努める
- ③ ハイキング企画や SNS を通じて現役/OB・OG の交流活発化を図る

最新技術も活用しますが決して従来からあるものを止める訳ではありませんのでご安心下さい。
「早稲田に集い山を愛する仲間の絆をいつまでも、山好き仲間の心の故郷稲門山の会」を目指します。

2. 昨年度の活動状況（稲山会）

- ・ 2 月：年次総会新年会（出席者 OB/OG38 名、学生/会長 10 名）
- ・ 4 月：役員会。コーチ会、新人加入状況説明、今年度方針打ち合わせ
- ・ 5 月：加藤会長面談、新人加入状況、現役及び OG/OB 会方針説明
- ・ 6 月：稲門会通信 49 号発行
- ・ 7 月：役員会・コーチ会、夏合宿計画打ち合わせ
- ・ 10 月：役員会・コーチ会、新年会開催方針打ち合わせ。新旧現役 3 役加藤会長顔合せ懇談
- ・ 10 月：OB 会合宿（長野県隠れ宿「まほろば」）
- ・ 12 月：稲門会通信 50 号発行（郵送 155 名、電子配信 70 名）
- ・ 9 月～11 月：メーリングリスト整備（158 名）、ホームページ再開、SNS 立ち上げ、IT 環境改善



3. 現役の活動

- ・ 4, 5月：新人勧誘、新歓山行（新人11名、山行3回）
- ・ 8, 9月：夏合宿（実質3回、甲斐駒・千丈、立山、白根3山縦走）、
テント使用本格合宿（稲山会より新テント、マット購入支援）
- ・ 10月：新3役就任
- ・ 12月：登山講習会出席（代表2名、費用を稲山会で支援）
- ・ その他：個人山行を10数回実施

4. 本年度の役員体制（昨年から変更なし）

代表	村田 宜男（S53年卒）	コーチ会	鹿間 行喜（S52年卒）
副代表	常数 英昭（S49年卒）	同	本田 伸樹（S56年卒）
事務局長	米山 不器（S54年卒）	同	西山 通（S57年卒）
会計	柴原 至（S52年卒）	同	天野 智彦（H4年卒）
ホーム頁纏	山路 淳（S56年卒）	企画	三宅 辰幸（S53年卒）
顧問	行方 正幸（S51年卒）		

以上



【第2号議案】

会計 柴原 至

2024年度会計報告(2024年1月1日～12月31日)					稲門山の会
					単位:円
項目		収入	支出	残高	備考欄
前期からの繰越額				4,052,269	
年会費(振込分,新年会時現金分)	128人	640,000			24年分91人。25年分37人
寄付金		12,700			匿名
新年会会費		175,000			
預金受取利息		215			
収入合計		827,915			
新年会費用			365,500		講師謝礼30,000円含む
学生への助成金			92,898		テント代、講習会
稲山会通信 48号、49号			372,221		印刷費、発送費
会議費、手土産代			47,191		役員会、手土産代
銀行振込手数料			5,045		
ホームページ管理料、ネット関連経費			59,492		
郵便振替用紙作成			1,720		
支出合計			944,067		
収支合計		827,915	944,067	-116,152	3,936,117
項目別預金残高内訳書					
一般会計	ゆうちょ銀行			1,073,579	通帳残高額を確認済
	年会費入金振替郵便口座			358,042	通帳残高額を確認済
	みずほ銀行普通預金口座			645,857	通帳残高額を確認済
特別会計	予備費	ゆうちょ銀行	定期預金	843,000	通帳残高額を確認済
	予備費	みずほ銀行	定期預金	1,015,639	通帳残高額を確認済
	合計			3,936,117	
上記の会計報告を致します。					
会計幹事 柴原至					
(代表が銀行通帳残高書と照合確認済み)					

【ホームページの更新報告】

ホームページ担当役員 山路 淳

←

2021 年以降中断していたホームページの更新を再開し、まず稲山会通信創刊号から最新の 50 号までを揃えて、会員が閲覧できるようにしたことを実際の画面を用いて報告があった。

←

創刊号から揃った稲山会通信アーカイブス

←

OB会トップ

稲山会通信

No.15 2007年7月1日	No.30 2015年1月1日	No.50 2025年1月1日 (50号特別記念号)
No.14 2007年1月1日 (創立50周年記念報告号)	No.29 2014年7月1日	No.49 2024年7月1日
No.13 2006年1月1日 (創立50周年記念特別号)	No.28 2014年1月1日	No.48 2024年1月1日
No.12 2005年8月1日	No.27 2013年7月1日	No.47 2023年7月1日
No.11 2005年1月1日	No.26 2013年1月7日	No.46 2023年1月1日
No.10 2004年6月1日	No.25 2012年7月1日	No.45 2022年7月1日
No.9 2003年12月1日	No.24 2012年1月7日	No.44 2022年1月1日
No.8 2003年2月1日	No.23 2011年7月1日	No.43 2021年6月1日
No.7 2002年4月1日	No.22 2011年1月10日	No.42 2021年1月1日
No.6 2001年12月1日	No.21 2010年7月1日	No.41 2020年7月1日
No.5 2001年2月1日	No.20 2010年1月7日	No.40 2020年1月1日
No.4 2000年8月1日	No.19 2009年7月10日	No.39 2019年7月1日
No.3 2000年2月1日	No.18 2009年1月10日	No.38 2019年1月1日
No.2 1999年2月1日	No.17 2008年8月8日	No.37 2018年7月1日
No.1 1998年6月1日	No.16 2008年1月10日	No.36 2018年1月1日
		No.35 2017年7月1日
		No.34 2017年1月1日
		No.33 2016年7月1日
		No.32 2016年1月1日 (創立60周年記念特別号)
		No.31 2015年7月1日

稲山会通信

第50号特別記念号

稲山会通信

No.50

【稲山会オンライン通信】

2024年度
◆10月稲山会通信アーカイブスを使用可能にしました **NEW**

2021年度
◆11月10-12日 奥多摩三山～御岳山山行報告を山行レポート頁に
◆10月14日 緑ヶ谷山行報告を山行レポート頁にupしました
◆10月10日 香櫨山山行報告を山行レポート頁にupしました
◆7月18日 谷川岳山行報告を山行レポート頁にupしました
◆5月4日 西穂～奥穂～水河公園（1986年の記録）の報告を山行レ

2020年度
◆1月25日 筑波山登山（日本百名山登頂達成）報告を山行レポート
◆2月1日 2020年度 総会・新年会の写真を会のイベント頁に
◆10月9-10日 大宮薩摩小金沢山連嶺山行報告を山行レポート頁に

2019年度
◆10月9-10日 大宮薩摩小金沢山連嶺山行報告を山行レポート頁に

TOHSANKAI INFO / No.1 June 1, 1998

稲山会通信

第1号
1998年6月1日発行

発行人：新井昭夫 発行所：稲山会の会事務局 TEL03-3367-3723 FAX03-3367-6150 ©稲山会の会1998

OB会代表より

稲山会の会新年会も無事終了致しました。今年の新年会の特徴といえば、今までになく若い会員諸君が多数出席してくれたということです。これは偏に幹事及び連絡幹事諸君の協力によるものと感謝しています。又4月2日に幹事会を開きまして、これ以上の会員諸君の出席を望むならば、広報担当幹事の新井氏を中心に稲山会通信を発行することに依り、会員の身近な情報や日々の消息等をより緊密に伝えることが大切であるという結論に達しました。この情報誌をより充実させる為にも、又永く継続させる為にも会員諸君の近況をより早く、より多くお知らせ下さる様、今後の諸君の協力をお願いします。（大國恒雄 S.33）

山の会ホームページ URL: ←

<http://www.waseda-wms.net/> ←

アーカイブス閲覧にはパスワードが必要です。←

お問合せ先 yamanokai@waseda-wms.net ←

【現役学生とのハイキング】

副代表 常数英明 および コーチ会 本田伸樹←

卒業生と現役の合同ハイキングの開催予告があった。2025年6月 高尾山にて。←
詳細は後日メールで案内予定。←



第二部 講演会 ←

講師紹介 事務局長 米山不器より

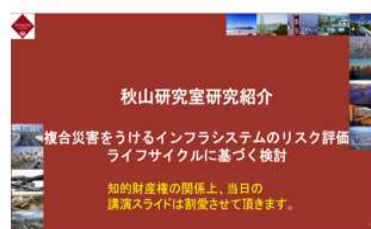
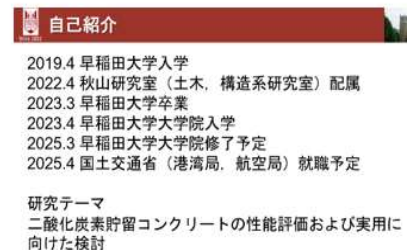
LINE 上で稲山会談話室を昨年 8 月に 9 名で開設したが、そのメンバーの一人、海崎真穂氏から投稿されたオランダの学会発表の出張報告がきっかけとなり、今回の講演を依頼したというエピソードの紹介があった。

講師 早稲田大学創造理工学部 修士課程2年 海崎真穂 (2021年山の会幹事長) ←

研究テーマ 二酸化炭素を吸収する画期的コンクリートの研究と開発



<https://www.wase>



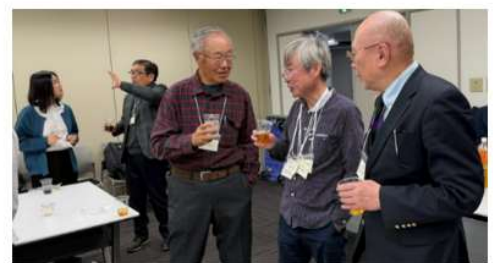
海崎氏の研究内容については大学が行った下記プレスリリースに詳述。

<https://www.waseda.jp/inst/research/news/78391>←



反響：研究テーマが今日的で社会性があり、元山の会会長の研究室で学ぶ、元山の会幹事長による講演ということもあり、会場から活発な質疑と暖かい激励が相次いだ。講演前9名だったLINE会員が講演後48時間で16名に急増したほど。←

第三部 新年会



(2)OB・OGの近況 (2025 年のメールとはがきの返信より)

文責；行方正幸(S50 卒)

◆清水正昭(S33) 昭和33年3月、第1回生卒として送り出されてから67年。山は登る、から語り眺める存在となりました。◆大国恒雄(S33) 残念ながら新年会は欠席です。◆宮野準治(S35) 毎年錦秋の穂高連峰に新雪も求めて上高地に行っていますが、今年は残雪期の五月中旬に行きます。私は単に山を眺めることに興味はなく、一度でも登った山を見てその時の登攀の足跡を懐かしむことにしています。そのようなことで今年も、上高地から、すべて故人になったザイル仲間の納見明德先輩(S34 年卒)、早川正(S36 年卒、因みに早川はエクアドル・アンデスのアルタール連峰の主峰オビスポ初登頂者)、そして中村郷士(S38 年冬の乗鞍岳合宿のとき雪崩遭難)らと登った前穂東壁の思い出に浸りに行ってきます。◆清水保宏(S36) 昨日の予定が終わったので今回出たいと思います。でもちょっと少ないものですね。◆廣瀬舜一(S38) 86才で秋田駒ヶ岳に登りました。蓴菜は九州の山では味わえない見事なもの。出席者に希望者だけでも1分間スピーチを取り入れ相互の理解を深めては如何でしょうか。◆山本貴次(S36) 所用があり午後3時以降の出席となります。◆加納孝治(S37) 役員諸兄、ご苦労様です。会報は楽しく、現役活動に元気を貰っています。仰臥が一番楽なポーズとなってきました。◆滝沢信一(S36) 事務局ご苦労様です。十日町の滝沢です。5月には88になります。総会出席も最後と思いますので参加したいと思います。2月は雪が多いので、大雪の場合には上京できません参加の可否はギリギリに決定させてください。◆東正躬(S37) ご苦労様です。稲山会報を楽しませていただいています。◆高尾勝彦(S37) 60年来のラグビーファンです。ここ数年は体調を崩し13日は秩父宮に行けませんがTV観戦では是非とも優勝と応援します。◆金子弘吉(S37) 晴れ渡る冬空のなか、自宅付近からは、片や富士山、片や槍、穂高がすっきりと見えます。両者を直線で宜場、富士山からは2/3、槍穂からは1/3の距離かと思います。ほぼ車しか通らない道の歩道で立ち止まり、毎日のように眺め思い出にふけています。◆鈴木健夫(S37) 毎日のウォーキング30分、週1のボウリング3ゲーム、日1のゴルフ1ラウンドを続けております。◆竹内敏(S38) 幹事ご苦労様です。今年4月に心臓のバイパス手術をし、それまでは10年ほど若い気力、体力だと思っておりましたが、今はトシ並になり困っております。毎日5千歩程歩いていますが、今年は欠席致します。◆村田進(S37) 残念ながら体力低下により、自宅のまわりしか出かけられなくなりました。会費は振り込みします。◆松本勝三(S37) 出席できず、申し訳ありません。◆吉田稔(S38) 陶芸とゴルフで忙しくしています。今年からは山登りではなくて山歩きにします。◆松村啓之亮(S38) 盛会を祈っています。◆藤井榮二(S39)「稲山会通信 No.50」送付ありがとうございました◆笠原豊(S40) 槍平→槍ヶ岳山荘着は呼吸力不足の日没で危うかった。樺海新道・霞沢岳へ行きたく同行者欲しい。◆高橋光正(S40) 総会は欠席します。昭和40年3月卒業。現役時代は生物部に所属。◆山崎征彦(S40) 毎度ご連絡有難うございます。取りあえず出席したいと思います。同期よ、結集せよ。◆長谷川徹(S40) 3年前に脊柱管狭窄症を発症、さらに緑内障を併発し、山登りはほとんど出来なくなりました。週3日程度 約1万歩の歩行により足腰の維持に努めています。◆松村葉子(S40) ご連絡ありがとうございます。残念ながら欠席させて頂きます。◆斉藤雄二(S41) 2025年の総会・新年会に出席予定しておりましたが、圧迫骨折の具合が余り好転せず、歩行不安につき、やはり欠席とさせていただきます。◆金子治雄(S

41) よろしく願いいたします。◆稲吉豊(S41) 幹事の皆様の献身に感謝しております。◆渡辺征二(S42) 皆様益々ご活躍のご様子なによりです。今年もお会いしたいのですが都合により欠席させていただきます。◆佐久間正昭(S43) 24年6月、4度目のスペインサンティアゴ巡礼を前年に続き妻と二人で歩きました。やはり仏側から入り、北の海側から山側に入るルート、750Kを32日間の旅でした。◆太郎良博(S43) お世話になります。現時点では出席できると思います。◆丹治和男(S44) 同期が元々少ないのに、去年は奥野、宮前両君がなくなり、寂しいかぎりです。◆島田弘康(S46) 役員の皆さまご苦勞様です。左足膝関節の不調でハードな登山は厳しくなりましたが、近郊の山のハイキング程度は年数回行ってます。OB会主催の春秋ハイキングを再開して欲しいですね。なお膝に負担のかからないダイビングは時々楽しんでいます。◆新井昭夫(S46) 楽しみにしています。今年の夏は立山・室堂に行き、帰りにトロッコ電車で黒薙温泉に行き露天風呂でゆっくりしてきました。◆豊田紳二(S47) いつも連絡を有難うございます。同期の森田と連絡が取れ、新年会・総会に出席しようと誘い合っています。本人から確認の連絡があると思います。◆神谷哲郎(S48) 山からはすっかり縁遠くなりましたが稲山会通信は毎回楽しく拝見しています。73才になりましたがおかげ様で夫婦で元気にしております。スイス企業の立ち上げに携わってます。◆加賀谷欣治(S49) 新年会 ちょっと都合ができる可能性があります。出席できない可能性が大ですのでお知らせします。◆後藤洋一郎(S49) 山での行動時間が7時間を超えると気力・体力の限界を感じるようになりました。75歳の壁でしょうか? 1/30 追伸: 昨夜から違和感がありましたが、今朝高熱が出てしまいました。日は休診日なので、風邪なのか、インフル/コロナかの判定はついていませんが高齢のOBも出席されることから(私も高齢ですが)1日の出席見合わせたく。すみません。◆岡康彦(S49) 役員・事務局の皆様、いつも有難うございます。◆常数英昭(S49) 皆様にお会いするのを楽しみにしています。◆石原順三(S51) 会報50号、小竹さんの聖岳の貴重な写真有難うございました。◆倉川秀明(S51) 1月末からパプアニューギニアにあるニューブリテン島の原生林の中の村を訪ねます。森林伐採を許さず森を守り続けている人々を支援し、交流するためです。皆様と現役諸君のご活躍とご安全をお祈りします。◆深澤徹(S51) 幹事のお仕事、ご苦勞様です。新年会ですが、ちょうど大学院生のころから続けている研究会の開催日と重なって、参加が叶いません。いま研究会では、井原西鶴の『好色一代男』を読んでいるのですが、これがまたとんでもない作品で(どういう意味でとんでもないかは、読めばすぐわかります)、今年の大河ドラマ『べらぼう』の世界と重なって、〈異文化〉としての江戸の世界にドップリと浸れます。まずはお詫びとご報告まで。◆岡安喜久夫(S51) ご連絡いつもありがとうございます。療養中のため、欠席させていただきます。皆様によろしくお伝えいただければ幸いです。◆調昭雄(S51) ギリギリまで様子をみたのですが、スケジュール的にムリでした。連絡おくれて申し訳ありません。「しらべ鍼灸院」では、若い方から同年配までの治療をしています。昨年、孫がふたり生まれました。◆狩野雅(S52) 総会参加でお願いいたします。インバウンドと航空運賃制度の変更で年金生活者には厳しい状況でしたが、1日から3泊で品川にしました。一カ月の灯油代を上回る値段でしたが、安いのを発見。去年は息子とスイスCHフランスFRに、妻とハワイ。山は木曽駒、宝剣と蓼科山に仲間達と行きました。夏に手稲山で沢登りをしていて右肩を痛め現在リハビリ。今月はニセコに出かけてチセヌプリ、ニトヌプリあたりで山スキーで復活の予定。東京のかみさんの実家を処分したので、東京が遠くな

りました。◆村田宣男(S52) 当然出席します。◆志知和彦(S52) 幹事の方々、ご苦労様です。70才代(2021年より)体調をくずし、動脈硬化で手術5回、急性心不全で手術1回、急性腎臓不全で3ヶ月入院、救急車3回。今、やっと週3日の透析で安定しています。◆角田清隆(S52) 元気です。◆米山不器(S54) 事務局長として頑張ってます! 早稲田に集い、山を愛する仲間の絆を、いつまでも! ◆本田伸樹(S56) 楽しみにしております。事務局長お疲れ様です。◆高田直(S58) 事務局長さんから、毎回行き届いた、心温まるメールをいただき感謝しております。◆里方昭彦(S58) ここはいつも海外出張があり、参加できません。皆様によりきお伝えください。◆西本英世(H3) 生きていますが、体調不良です。◆小田直輝(R4) よろしくお願ひします。◆高梨花奈(R6) お世話になっております。いつもご連絡くださりありがとうございます。総会新年会ですが、都合により出席を見送らせていただきます。申し訳ありません。ぜひまたの機会に、皆様に会えることを楽しみにしております。

COLUMN・創造展

～2025 第78回創造展

- (1) 会 期: 2025年5月21日(水)～27日(火)
- (2) 会 場: 上野 東京都美術館 2階 1～2展示室
- (3) 主 催: 創造美術会
- (4) 後 援: 文化庁・東京都



吉田稔 OB(S38 年卒)



創造美術会プロフィール(抜粋)

創造美術会は1947年7月に結成され、発起人は原創三郎、新野歆一、保科米三ら15名からのスタートだった。戦後の混乱期中で、真剣な研究と努力を鞭撻し合いながら『その成果を日由に発表できる会』を持ちたいという願ひが一致して始まった活動である。設立当初から謙讓な精神と強固な団結力で休むことなく維続、現在(第78回)に至っている。創造展は、洋画、日本画、染織画、彫刻、陶芸の5部門で構成されている。作品の傾向は、風景、人物、静物と具象的なものが多いが、抽象的な作品をはじめ幅広い表現を受入れている。染織画部門は他の公募展ではあまり見られない同展の特徴の一つである。また、陶芸部はレベルが高いと各方面から評価されている。

なお、令和7年度から代表に当会の吉田稔 OB(S38 年卒)が選出されている。「創造展」は毎年5月に東京都美術館で開催されるので招待希望者は good-inter@msh.biglobe.ne.jp まで。



(1) 2025 年ハイキング企画【高尾山】 村田宣男 (S53 年卒)



高尾山頂にて記念撮影



最後の階段を登る打矢、笠原 OB

梅雨入りとなりうっとうしい天気が続くなか、2025 年 6 月 14 日（土）に 6 年振りで「稲門山の会」及び現役「山の会」の合同ハイキングが高尾山にて実施されました。当日は曇天でしたが OB/OB12 名、現役 9 名が参加しました。高尾山口駅に集合したメンバーは、数パーティに分かれて山頂を目指しました。

今回は女性の参加者も多く華やかで楽しいハイキングになりました。幸い雨はほとんど降らず、現役学生を中心とするパーティは 11 時頃には山頂に到着し、後続の OB/OG パーティも 12 時迄にはほぼ全員が頂上付近に到着しました。

記念撮影を終えたのち、ケーブルカー終点近くのビアマウントに向かい、全員参加の楽しい懇親会が実施されました。本席上では打矢 OB による米国トレッキング企画の説明会も実施され現役諸君が熱心に聞き入りました。その他の場面でも、山の会を縁に繋がった山好き仲間の世代を超えた賑やかな懇談が行なわれ、あっという間に 2 時間が過ぎました。

今回の企画は盛況で参加者も高評価が得られましたので、今後も実施を検討したいと考えております。今回参加されなかった会員の方々も次回の参加をお待ちしております。

参加者（敬称略）

稲門山の会：打矢（S37）、笠原（S40）、金子（S41）、福田（S46）、豊田夫妻（S47）、村田（S52）、柴原（S52）、山路（S56）、西山（S57）、天野夫妻（H6）

現役山の会：斎藤（3 年）村上（2 年）、有本（新人）小田（新人）、正川（新人）

篠田（新人）、青木（新人）、小暮（新人）、佐藤（新人）



No1 高尾山口に集合、自己紹介からスタート



No2 出発前に全員で記念撮影



No3 びわ滝にて現役学生と福田 OB



No4 頂上直下に着いた打矢、西山 OB



No5 金子、福田 OB と豊田夫妻



No6 一足先に頂上に着いた現役学生



No7 打矢 OB に熱心に耳を傾ける現役学生



No8 世代を超えた楽しい交流です、豊田、天野両夫人と新人学生

(2) 不思議な低山「塩の山（しおのやま）」 三宅辰幸（S53 年卒）

J R 中央本線塩山駅から北西の方角に目を向けると松の緑に覆われた低山「塩の山（しおのやま）」が視界に入ってきます。塩山駅は大菩薩、乾徳山、西沢溪谷などへの下車駅として馴染みある駅かと思います。

「塩の山」は標高 553m、周囲約 3.5 km、面積は約 55 万㎡（東京ドーム 12 個程度）の独立峰で、塩山駅から徒歩約 15 分位のところにあります。



塩の山(553m)

登山口の一つは、現在 5～6 件の温泉宿が営業する塩山温泉郷にあります。最も古い温泉旅館の「廣友館」脇の急な階段を、40 段ほど登ると登山道の案内板が出てきます。標高差約 200m、頂上と途中の休憩ポイントには東屋もあり、頂上へは往復で約 1 時間 30 分程度と、散歩気分で手軽に低山登山が楽しめる地域のシンボルであります。登山道の案内板の右手には鉄柵によって立入ることは出来ませんが、徳川家康が天正 11 年（1583 年）4 月に、麓の向嶽寺の東陽軒に二泊し、富士山を仰ぎ見たとされる磐座・国見岩があります。磐座・国見岩の崖下には塩山温泉の源泉があり、泉質はアルカリ性単純泉、効能は貧血、神経痛、胃腸病、リュウマチなどとなり、大菩薩、乾徳山、西沢溪谷などの帰りに日帰り入浴で疲れを癒し帰路に就く方々も多いようです。

もう一つの登山口は、「塩の山」のほぼ中央部の懐にある向嶽寺の脇からとなります。向嶽寺は臨済宗向嶽寺派の大本山で、1380 年に抜隊得勝の開山で、山号は「塩山」、寺の中門にその扁額は掲げられており、これが現在の地名の由来とされています。向嶽寺の「嶽」は富士山を意味し、前述の磐座・国見岩（東経 138 度 43 分 43 秒）と富士山頂の八葉蓮華の一つである白山岳（東経 138 度 43 分 43 秒、剣が峰は東経 138 度 43 分 38 秒）、北の甲武信ヶ岳が磐座・国見岩の南北ライン上でピッタリと重なります。また、磐座・国見岩の緯度（北緯 35 度 42 分 36 秒）上には、東に犬吠埼、西には鳳凰三山の地蔵ヶ岳、更にその西にはゼロ地場空間を形成する分杭峠があります。更に、夏至冬至ラインには大菩薩と聖岳があり、塩の山山頂から、夏至には大菩薩からの日の出を、冬至には聖岳に沈む夕日を見ることができます。国見岩の登り口には北極星を崇める妙見大菩薩の石塔や山の神が祀られ、塩山温泉の源泉の傍らには熊野権現の水神を祀る祠も建立されており、先人たちが何を感じ取っていたのか不思議なものを感じます。



山頂から望む富士山

このような偶然を地質学的に探ってみますと、「塩の山」の誕生の地はユーラシア大陸東岸の深海で、約 5200 百万年～3200 万年前に砂岩・泥岩が堆積し、原始・塩の山の地層が産声を上げています。その地層は約 2000 万年前になると地殻変動で大陸から引き剥がされ、プレートテクトニクスで太平洋に漂流し始め、約 1500 万年前に現在の地でその骨格を形成し始めました。「塩の山」付近はユーラシアプレート、北米プレート、フィリピン海プレートが一点で交わるトリプルジャンクションに位置します。この時期、プレートテクトニクスによって日本列島の中央部が観音開きに開裂し、海水が流入し、フォッサマグナの海峡が出現しますが、塩の山はこれらの陥没に耐え、反対に関東山地とともに隆起し、太古の海峡に浮かぶ弧峰となりました。さらに約 100 百万年前、フィリピン海プレートが北上し、伊豆半島が関東山地に衝突し、その衝撃によって日本最大最古の断層「中央構造線」を八の字型に大きく湾曲させました。こうした中で日本最大規模の花崗岩体が形成され、今日その隆起した姿は前述の奥秩父山塊の中央に位置する甲武信ヶ岳、瑞牆山、金峰山、国師ヶ岳、西沢溪谷などで体感することができるわけです。



奥秩父山塊

もう一つ、その名前「塩の山」の由来については、古今和歌集の第 7 巻、賀歌の第 3 首「しほの山 さしでの磯に住む千鳥 君が御代をば 八千代とぞ鳴く」（詠み人知らず）に登場する「しほの山」と伝えられています。古今和歌集は醍醐天皇の命令により、万葉集に選ばれなかった古い和歌も含めた秀歌を対象に、紀貫之らが選歌し、全 20 巻で構成され、905 年に編さんされました。第 7 巻には 22 首が収録されており、そのうち 18 首は特定の個人の長寿を祝う内容なのですが、第 1 首から第 4 首までは作歌された年代が古く、歌人は「詠み人知らず」となっています。ちなみに、第 1 首は「わが君は 千代に八千代に さざれ石の 巖となりて 苔のむすまで」（詠み人知らず）となります。今から千年以上前の平安時代に、長寿を祝う意味合いの和歌として都人に愛された和歌の一つの舞台がなぜ平安京から遠く離れた東国のこの地であったのか、ここでも不思議を感じます。



中央線塩山駅から

機会があれば、中央本線塩山駅ホームから北西の方角に見える小山を眺め、目を閉じて、大きく深呼吸してみてください。

(3) 宮澤壮介 (S36 卒) 鎌倉散策 20 余年

信州の鎌倉から相州の鎌倉へ

毎月第 1、第 3 火曜日(コロナ以前は毎週)の午前 10 時、北鎌倉駅のホームに集うのは横浜周辺に住み、今年米寿を迎えようという長野県は上田高校卒の同期生たちである。

この「鎌倉散策会」は 20 年余りも続いていて、メンバーにとっては生活のリズムになっており、いまだに健康で出歩けるのはこの会のおかげだと確信している。

仕事からリタイアした者が始めた 2000 年頃スタートし、エントリーメンバーは多いときは 15 人を超えていたが、80

代の今では 10 人程度。毎回集合時間に顔を揃えた者で、鎌倉や三浦半島の神社仏閣やハイキングコースなどを巡り、機会があれば鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』を学んで、全員が「武家の古都」のガイドができるほど鎌倉に精通している。

一方、上田市の中心街から千曲川を挟んで西に広がる塩田平は信州の鎌倉と呼ばれ、田園風景の中に国宝・重要文化財の寺社が散在し、無言館など人気の美術館などもある。その信州の鎌倉近くの学び舎でともに 3 年間を過ごし、社会の八方に散ってわが国の高度経済成長を支え、半世紀ほどの歳月を経て今度は姉妹都市である相州鎌倉に集まって界限を逍遙する。よくできたドラマのようだと自賛している。

毎週同じところに出かけて何が面白いのかと言われるが、鎌倉は自然豊かな歴史の街で、折々の花や街のたたずまいに季節の移ろいを感じ、暑いときには木陰で、寒いときは陽だまりで弁当をひろげて至福のひとつときを過ごすというのがいつものパターンである。

そうはいっても月に 1 回程度は場所を変え、例えば江戸から昭和の雰囲気求めて出かける谷根千(谷中、根津、千駄木)では谷中銀座で食べ歩きをし、森鷗外や江戸川乱歩が散歩した坂道を歩き、正月には深川・日本橋や神楽坂～新宿の七福神を巡り、小江戸川越で街歩きを楽しみ、多摩丘陵をハイキングするなど遠出もしている。

鶴岡八幡宮は頼朝の 5 代前の頼義が京都の石清水八幡宮を勧請し、頼朝が現在の地に移して街づくりの中心に据えるとともに鎌倉武士の心の拠り所としたのである。街の真ん中にある八幡宮は鎌倉で一番参拝する機会も多かったところである。そこで出会った大きな出来事は、武士たちの栄枯盛衰を見続けた樹齢千年の**大銀杏**が 2010 年 3 月 10 日に突然倒壊したことである。この銀杏は『鉄道唱歌』等に歌われている源氏の 3 代將軍実朝を暗殺するために甥の公暁が身を隠したという伝説の大木で、その少し前の 3 月 2 日、八幡宮の近くを通りがかったときメンバーの一人が「大銀杏が少し傾いている。」と言った。他の者には分からなかったが、8 日後に大銀杏倒壊のニュースを聞いて彼の慧眼に驚いた。現在大銀杏の跡はひこばえ(切り株から出る若木)が 10 メートルほどに成長している。

また、2007 年 10 月 9 日の散策では、雨模様なのでとりあえず鶴岡八幡宮にお参りしようと



吉田 OB 宮澤 OB(著者)



大銀杏

行ったところ、「ミスインターナショナル 2007」が日本で行われるため各国代表が来日しており、国名を記したタスキをかけた美女たちが観光のためか八幡宮を訪れていた。さっそく私たちは一緒に写真を撮らせてもらい、おぼつかない英語で鎌倉の説明をするなど交流を深めた。そしてこのことは数多く参拝した八幡様のご利益に違いないと信じた。



ミスインターナショナル一行

古希の千曲川源流と甲武信岳

当時この山行に参加したメンバーは現在より17歳も若く、毎週鎌倉や三浦半島、近郊の低山などを歩いていたので、本格的な登山の経験は乏しくても気力・体力には自信があり、70歳の節目に思い出に残る山行をしようということになった。

全員一致で選んだのが千曲川を遡って源流に達し、甲武信岳に登って小屋に1泊、翌日は甲武信岳より数メートル高い三宝山を経由して十文字峠まで下り、アズマシャクナゲの群落を見てスタート地点に戻るといふさほど難しくはないが魅力的なコースである。



千曲川信濃川水源地にて

千曲川は、私たちにとって幼少の頃から真っ黒になって泳ぎ、ハヤやウグイが石の下に潜んでいるのを手探りでつかまえ、石切りで競争し、長じては失恋の痛みを癒してくれた母なる川で、その源流を訪ねることは永年の夢であり、聖地への巡礼だった。

2007年6月18日、信州毛木平の登山口に8人の高齢者が勢揃いした。曇っているが、真っ赤なレンゲツツジが出迎えてくれる。歩き始めて大分経っても源流はまだ遠いことを物語るように瀬音は高い。「男ばかりか!」という声に振り向くと、ホームページの写真で見た甲武信小屋の主の徳さんである。大きな荷物を担いでいるので聞けば、ヘリの会社が北ア水晶岳で事故を起こし業務停止になったので毎日荷揚げをしているのだという。

2時間余りでナメ滝に着き、さらに1時間半歩くと待望の「千曲川信濃川水源地」に到着、ガイドブックの標準タイムよりかなりゆっくりしたペースだが、感激の握手をして木の根から滴り落ちる甘露をころゆくまで飲み干す。そして高校の頃国語の教師に全員暗誦させられ、いまだに記憶に残っている島崎藤村の「千曲川旅情の歌」とカール・ブッセの「山のあなた」をみんなで唱和して念願の成就を祝う。



水源地の甘露を味わう

ここまでは順調だったが、そのあとの傾斜はきつく1時間半ほどかかって何とか甲武信岳(標高2475m)山頂に到達する。晴れていれば深田久弥の『日本百名山』のうち43座を見ることが可能だというが、山頂は霧に包まれているだけである。ただ、初めて2500m近い高山に登ったことで皆満足している。10分余り下ると今夜の宿甲武信小屋に着く。煙突からけむりが昇っていて初めてなのになぜか懐かしさを感じさせる昔風の山小屋である。一休みしてから、すぐ下

にある荒川源流の水を飲みに行く。笛吹川の源流は少し離れているというので、日本海にそそぐ千曲川(信濃川)と太平洋にそそぐ荒川、両大河の源流の水を飲んだことで満足する。夜、疲労のせいか寒さのためか足をつる者が続出する。

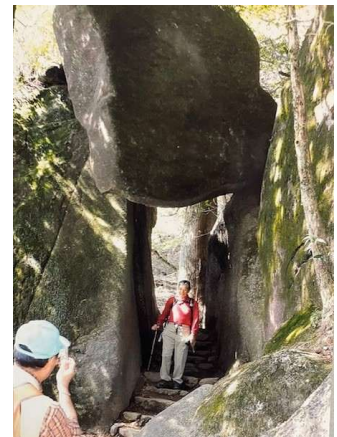
翌朝は全員元気になっていた。天候は昨日と同じで視界は良くなかったが、途中の三宝山から振り返ると、雲の切れ目に一瞬富士山が顔を覗かせてくれる。これで心残りはないと長野県と埼玉県を分ける県境尾根を更に北へ向かい十文字峠を目指す。

雨は降っていないので適当に休憩を取りながら 4 時間近く歩くと、濃霧の中に咲き乱れるアズマシャクナゲが次々に姿を現す幻想的な光景を見て感動する。十文字小屋で昼食を取り毛木平まで一気に下る。古希の山行は大満足のうちに終了した。

低山登山について

『稲山会通信 第 49 号』の「現役学生の山行」を見て頬が緩んだ。日和田山はまだ登ってないが(巾着田の彼岸花には行った)、三浦アルプス、筑波山、高尾山などはいずれもわが鎌倉散策会が過去に何回か登った低山だからである。せめてコロナ以前だったら私たちもまだ体力が残っていて現在のように上り下りの多い道を避けることもなく、孫世代の後輩たちと一緒に登れたかも知れないと思えばちょっと残念である。前記のほか登った低山は三浦半島最高峰の大楠山、摩崖仏や岩登りのゲレンデのある鷹取山をはじめ、箱根、丹沢、奥多摩の山、筑波山、久里浜からフェリーで房総の鋸山等へも足を延ばしている。

その中でお勧めは冬の沼津アルプスで、主峰の鷲頭山は 392m と低い、7 山 7 峠が連なってアップダウンを繰り返し、小粒でもピリリと辛い縦走路である。全山を縦走すれば 7 時間ほどかかるが、それぞれの峠はバス停も近くエスケープルートとしても利用できる。冬は晴れる日が多く、雪を被った富士山と駿河湾の絶景が目前に広がっている。



筑波山



大楠山で集合写真

最近低山登山がブームになっているという。NHK でも放映しており「山高きがゆえに尊からず」などと言って山に登るだけでなく、その山にまつわる言い伝えや歴史などにも触れている。また、雑誌『山と溪谷』では 2021 年 11 月号で創刊以来、初めて「低山」を特集している。ブームは人口の多い団塊の世代やそれ以前の世代が寄る年波で高山に登れなくなって低山に移動してきたという理由もあるだろうし、低山は人の住む里にも近いので歴史や伝説には事欠かない。また、山が信仰の対象になっているケースも見られる。

歴史的に見れば、山麓の村では経済的にも山に依存していることが多く、村同士で利害が対立することも少なくなかった。水利権や入会権の争いである。これらが伝説や民話として受け継がれてきているので、山村の研究も低山歩きの醍醐味である。初期の山の会では会津松枝岐や信越秋山郷など平家の落人集落の山村調査に入っている。



【特集Ⅲ：2025 年山の記録】

(1) キナバル山行記

- ① 日程) 2025/2/23-24
- ② メンバー) 海崎真穂 (R 年卒), 豊永あかり (友人)
- ③ 天候) 快晴, 晴, 晴れ→強風
- ④ 行動記録) 行程 : 2/23 8:47 Timpohon Gate (入山)
11:51 Layang-Layang (4km 地点、お昼 25 分休憩) 14:24
Laban Rata (6km 地点宿泊地)
2/24 2:25 Laban rata 出発 3:57 Sayat Sayat (7km チェックポイント) 5:34 Low' s peak
4095.2m (8.72km) 7:45 Laban rata (朝食、1 時間ほど休憩) 12:53 Timpohon Gate (下山)



日の出前の山頂

海外の山に行きたい、せっかくなら富士山よりも高い山(富士山には登ったことがないのだが)に登りたいと思い決めたキナバル山行。相棒は高校の部活の同期で大学で山に登っている豊永。彼女も大学院を修了するので2人の卒業旅行としてマレーシアに行くことにした。

キナバル山は世界遺産になっていることもあり、個人での入山が規制(ほぼ禁止)されているため、ガイドツアーで2人に1人のガイドさんについてきてもらう形の山行だった。これならなんとでもなるだろうと忘れ物だけ注意しパッキングを済ませコタキナバルへ。

たかを括って山に行くまでは観光を、と思っていたのだが、体調がおかしく丸1日寝込む。山前にまず一難。果物やポカリを買ってきてくれた豊永に感謝だが、栄養のあるものが食べられず調子も万全でない状態のため、不安を抱えつつキナバル国立公園(標高 1800m)で前泊。

1 日目。1800m から 3300m まで 1500m ほど高度を上げる。名前等が書かれた ID カードを受け取りガイドのデブロンさんと合流し登山口へ。最初の 1km はゆっくりね、頑張るのは明日だから今日のはんびりいこうと声をかけてくれる。だが元々スイッチが入るのが遅いタイプであることに加え体調不良だったこともあり最初が私にとって本当にしんどかった。



ウツボカズラ

3km 地点付近でスッパイマンを食べて少し回復。4km 地点のお昼ご飯は入山前に渡されていたランチボックスに入っているりんごをかじる。ランチ後は心に余裕が出てきたこともあり、ウツボカズラや 3000m 付近の割に高木が多いことなどを楽しみながら歩く。なお、視界はないため、あそこまで行きたいという憧憬を抱くこともなければその道のりに絶望することもない。

ラパンラタレストハウスまでの距離が 1km を切ると 100m ごとに標識が出てくるためそれに励まされながら歩いていると割とすぐレストハウスに到着。いいペース。ガイドのデブロンさんは写真を撮り慣れているので、何枚か写真を撮ってもらい夕食(17 時)を待つ。

夕食はビュッフェスタイル。食欲はあまり回復してないがパイナップルがあるのが嬉しい。水は 500cc11MYR(1MYR≒33 円)で売られていて、キナバル国立公園で買うのと同額であった。登っている時に歩荷さんにスイスイ抜かされて尊敬の念で見ていたため、価格が同じのは歩荷さんの労力を反映していないようでなぜか許せない。だが、水は必要なのでありがたく明日分を補給し、就寝。

2 日目。山頂まで高度差 800m。レストハウスに不要なものを置いていけるので身軽な状態で 2:25 登山開始。レストハウスにいた人全員が同じ行動パターンなので行列をなしぼぼ階段の道を進む。サヤサヤ ID を見せチェックインすると間も無く階段は終わりスラブ地帯へ。角度は結構あるが、岩質が良くフリクションが良く効く。坂道を登っているみたいにさくさくと登ることができ楽しい。それと同時に、サヤサヤ小屋より上が閉鎖になる日があるとのことを、確かにこの岩が濡れていてはどうしようもないなということを強く感じた。

日の出に登頂を目指すわけだがデブロンさんによるとその日は風が特別に強いこと早めに登れていることを考えると日の出は山頂直下ではなく下山しながら見るのが良いだろうとのことだったので、日の出の時間を気にせずにとりあえず登る。岩登りも行ったことあるという話をしていたことが要因だと思うのだがロープのある道から逸れルーフアイするデブロンさん。岩場を進むのは楽しいし、おかげで山頂に着いた頃にはほとんどの人を抜かしていたようだ。自分たちが着いた時は 1 組しかいなかったのに写真を撮っている間に行列ができていたのでデブロンのナイスジャッジに感謝。

4095m。体調や天候が不安だったが、全てが杞憂に終わりが来ることができた。達成感と安堵感が入り混じる。同時に登りが終わってしまうことを少し寂しく感じる。

山頂に着いた頃に空が明るみ始め、下山途中には見事な朝焼けが見られた。空もそれを反射する岩肌も綺麗で、改めてキナバル山登頂できて良かったと感じた。写真を見ただけだと忘れがちだが風が強かったことも併記しておく。始めて立ってられない風を経験したが足場は安定しているので面白いな、くらいに感じていた。その後は順調に下山し階段が多くて大変だったくらいしか感想がないので記録はここまでとする。

2 人とも高山病になることもなく天候に恵まれ充実した山行、卒業旅行となった。

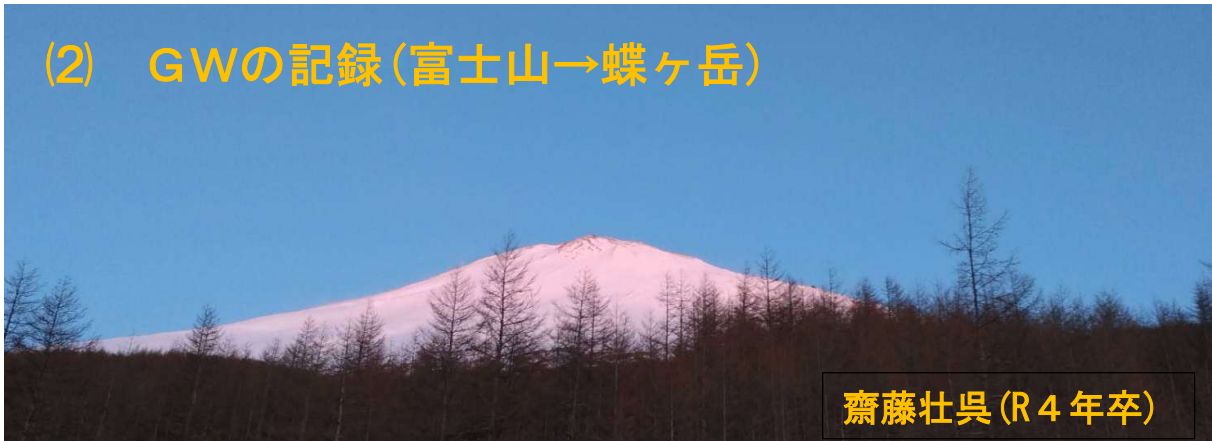


セントジョンズピーク (4091m)



朝焼けのローズピーク (4095m)

(2) GWの記録(富士山→蝶ヶ岳)



齋藤壮呉(R4年卒)

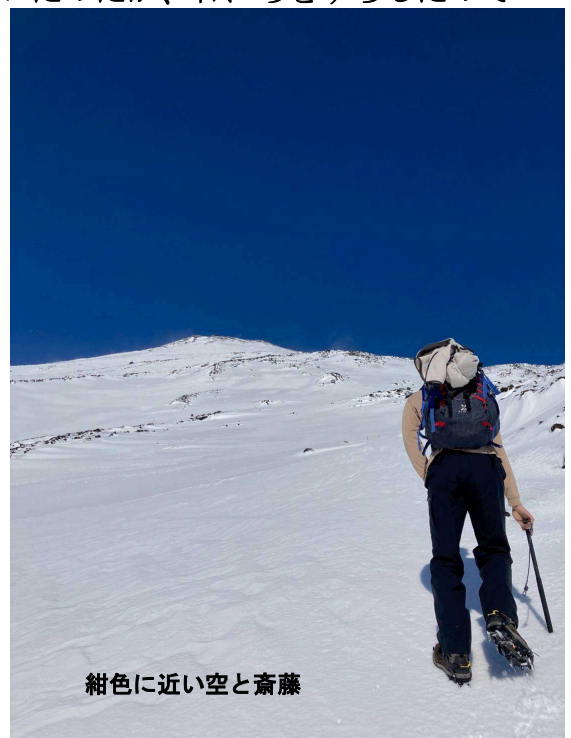
- ① 日程) 2025/5/2-5 ② メンバー) 齋藤, 望月 ③ 天候) 快晴, 風
 ④ 行動記録) 5/3 富士山須走口から 5:30 須走五合目 11:45 富士山火口 15:00 須走五合目
 5/5 蝶ヶ岳長堀山経由 5:30 徳澤園 08:30 蝶ヶ岳 10:30 徳澤園

今年のGWは前半4連休と2日間あいて後半5連休だった。前半は山岳会のクライミングレスキュー訓練と、山の会の3つ下の後輩木村と源次郎沢で沢はじめ、会社の同僚と川苔山ハイキングだった。後半はロードランナー兼丹沢トレランナーの友人望月と富士登山の後、上高地に入り蝶ヶ岳に登った。せっかくの連休に長く山に入ることとはできなかったが様々な登山を楽しんだ。以下富士山(の後の蝶ヶ岳も少し)の記録。

当初の予定では、最も標高差の小さい富士宮口からと考えていたが、5月中旬までは5合目までの道路が夜間は凍結のため閉鎖とのことで、勝手が悪かったので少し距離は長くなるが須走口とした。また、5月1日の金曜日のうちに5合目に入り、2日に登山と考えていたが、2日は生憎の暴風雨だったため3日に変更した。

2日の昼に横浜で合流し、豪雨のなかゆっくりと富士吉田に向かう。富士登山後に車中泊はきつかりと、2日は宿に予約をいれていたのだが、日にちをずらしたので登山前に来ることになってしまった(GWなので宿は日をずらせなかった)。まだ何も達成していないが、ゆったり温泉につかり、おいしいごはんを食べた。とはいえ心は外の暴風雨と次の日の風の予報ばかり気にしていた。雨のせいで富士山では30cmほど雪が積もるとの予報で、3日は風が20m/secで午後はさらに強くなっていくとの予報だった。「さすがに登頂は無理かなあ、八合目の3,100mあたりで引き返すか～」と話し、卓球などしつつ、準備して床に入った。

3日は快晴、まだ暗いうちに宿を出て5合目の駐車場にて日の出を見た。須走口からの富士



紺色に近い空と齋藤

登山は初めてで、いつも（富士宮口から）と違って東京方面がよく見えた。前日の雨のおかげか空気が澄んで、江ノ島や横浜ランドマークタワーさえ見えた。五合目では風はなかったが、見上げる真っ白な富士山の稜線には風で舞い上がった雪が流れていた。六合目につく前には既に一面雪だった。まだ雪は締まっていて歩きやすかったがトレースもないので好きに歩いていいよと言われるとどこを歩いたものか迷う。七合目でおじさんスキーヤーに追い越され、そのあとはずっと彼のトレースをたどった。

風は時折吹き、20m/sec というほどではなかったが、立ち止まる。さほど冷たくないが、風に運ばれる雪が顔に当たって痛かった。時間がたつにつれて強くなっていくという予報から、気持ちが焦る。また、先行するおじさんスキーヤーが意外と早く、距離を離される。一方、相方の望月は雪山の経験こそ浅いがトレランナーだけあって僕の後ろで涼しい顔をしている。三重苦だ。

とはいえ、焦っても仕方がないので、一步ずつ歩みを進めていく。風は低気圧が通りすぎた後の北西方面からの風で、須走のルートではそこまで風は強くならなかったことが救いだっただ。11時半過ぎに山頂の火口に到達。火口では、これが20m/sec か、と納得できる、動けないくらいの風が吹いていた。そそくさと火口との写真を撮り、下山した。下りでは懸念していたほど雪は硬くなく、安全に降りることができた。七合目あたりから大砂走に入り、腐った雪をずさずさと踏みながら下った。

その後、無事登頂できたことによる満足感から上高地にいくかかなり迷ったが、その日は河口湖畔の道の駅で車中一泊し、4日に上高地・徳澤園に入った。富士山は火山性の岩と積もりたての雪の真っ白な世界だったため、上高地の緑と美しい水そして岩と雪を見て、来てよかったと思った。蝶ヶ岳は富士山に比べるととても楽ちんで、頂上からは北アルプスの大パノラマを望むことができた。なんて割のいい登山だろう。と、思ったら帰りの高速は小仏トンネルを先頭に30kmの渋滞だった。

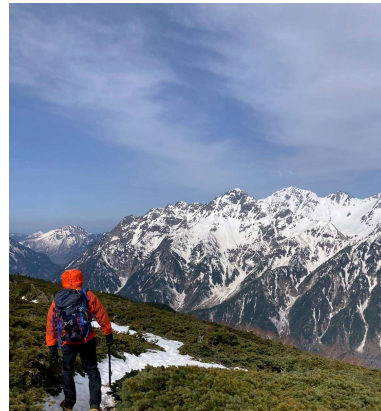
望月はその次の日の朝も20km走ったらしい。やはり、重要なのは体力だ。



下りもまだ元気な望月



9月に奥穂南陵を登るぞ！

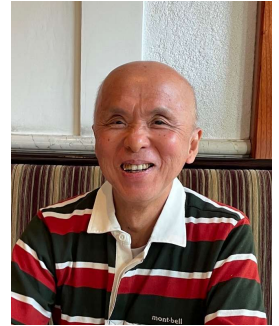


蝶ヶ岳から穂高岳

【特別寄稿ヒンズー・ラジ山脈 Thui I 峰への挑戦】

豊田紳二 (S47 年卒)

豊田OBのヒンズー・ラジ山脈 Thui I 峰 (6,660m)の記録は、第 50 号の「備忘録」で掲載したいと思っていた。1971 年行われた早大山の会(学生の会)の森田・豊田・須田(4 年生)・西山(3 年生)の 4 人組によるこのヒマラヤ遠征は、ユニークかつ画期的なものであった。①現役学生の少数精鋭主義②パキスタンのヒンズー・ラジ山群という地域性③標高 6,660m のバリエーション的未踏峰。登頂は果たせなかったがこのチャレンジは驚きであった。



50 年以上の前の遠征であるが、正直、登山経験の浅い(北アや南アの本格的冬山・春山 3 シーズン、本チャンの岩登り 10 数回)現役学生によるヒマラヤの未踏峰への挑戦だから、現代の尺度で考えれば全く無謀な行為である。装備や登山技術だって現代とは比較にならない程お粗末で地図も資料も IT もない。経験不足は精神力と体力でカバーしなければ、その代償は生命で支払うことになる。でも、当時はそれが、冒険が許される時代であった。

ヒマラヤ遠征など一生に一度の夢。正直その後は一流大学卒、一流会社、裕福な家庭というワセダのエリートコースから外れた人生を歩む覚悟が必要であった。そんな人生を賭けて挑戦する価値がヒマラヤにあったように思う。

Thui I 峰の挑戦はそのユニークさゆえ、当時の山岳界トップレベルの先見性に富んだ発想と思うのは私だけだろうか。52 年後、早大山岳部 OB の鈴木雄大氏ら 3 人が、隣の Thui II 峰(6,523m)の北西壁に新ルートを開拓した。豊田OBらが目をつけたヒンズー・ラジ山群は、今世界の登山家からアルパインクライミングの新しい道場として注目を浴びている。(S50 年卒：行方正幸)



<< まえがき >>

1971年のヒンズー・ラジ山脈ツイI峰遠征の記録は「やま」14号及び創立五十周年記念誌「やま」に掲載されている。隊長・森田の文書は緊張感があり、臨場感もたっぷりで秀逸。半世紀も前の日記を読み返すと昨日のことの様に思い出される。

今回お届けするのはパートⅡとも言うべきルート開拓及び荷揚げ、アタックの様子。私達4人が何を見て、聴き、感じたのか？ 登攀ルートの説明などは斜め読みして頂き、皆さんにも是非海外遠征を追体験して頂きたい。

<< 1971年早大ヒンズー・ラジ登山隊 >>

1971年にヒンズー・ラジ山脈の未踏峰ツイI峰(6,660m)の登頂を目指す。

ヒンズー・ラジ山脈の最高峰コヨ・ゾム(6,872m)。第2の高峰ツイI峰は西隣に位置する。両峰の鞍部を源頭とし、北に向かって流れ下るコタルカシュ氷河を遡り、標高差1,300mの北西壁に挑む。隊員は下記の4名。

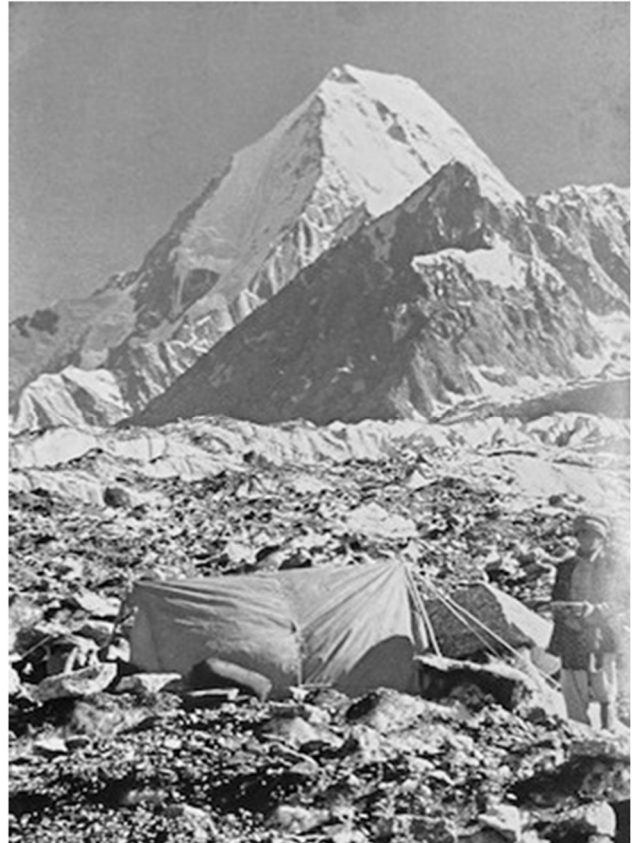
森田生次(22歳、理工学部4年生)

豊田紳二(21歳、理工学部4年生)

須田義博(21歳、理工学部4年生)

西山一夫(21歳、法学部3年生)

森田と豊田は山の会4年生、須田と西山は2年生である。隊にはリエゾンオフィサー(連絡将校)のジャミール・ベルベツ陸軍大尉(23歳)とコックのDaudが同行した。



B. C. から望むツイI峰(6,660m) 雁部貞夫氏撮影

<< コタルカシュ氷河 >>

8月20日(金)

ブニ村を出発して10日目、ヤルフン河左岸を進むキャラバンの最終日。小さな湖を左に見て、右手の尾根を回り込むとコタルカシュ氷河、その奥にツイI峰が見えてくる。第一印象は「高いな!」、「本当に登れるかな?」氷河末端の左岸サイドモレーン上にベースキャンプ(以下「B. C.」)建設。標高約4,000m。ポーター達が去って行くと、隊員とリエゾンオフィサーとコックの6人だけの世界となる。

8月21日(土)

午前中はレーション。午後、森田と二人で、コタルカシュ氷河の偵察に出かける。休んでみると、氷河の動く音や、氷の崩れる音が不気味に響く。B. C. への帰り、何となくだるい。夜、寝袋に入り体が温まると気分が悪くなり3~4回嘔吐。高度障害、まるで二日酔いのような。テントから寝袋を引きずり出して一人外で寝る。

8月22日(日)

食欲が無く、朝食は紅茶だけ。休養。他の3人は偵察兼ボッカに出かける。午後、リエゾンオフィサーと2人で湖に行く。息が切れて苦しい。

8月23日(月)

B. C. 発 9:40 - C 1 着 2:50/発 3:30 - B. C. 着 5:15

22kg 位の荷をボッカ。ほとんど左岸のサイドモレーンを歩くが途中で氷河の上を歩く。高度のせいか 30kg 以上に感じる。C 1 は、コタルカシュ氷河の左岸に注ぐ小さな氷河の左岸のサイドモレーン上。ツイ I 峰は手前の尾根に隠れて見えないが、東隣のコヨ・ゾム峰(6,872m)がよく見える。

8月24日(火)

B. C. 7:00 - C 1 10:15/10:45 - B. C. 12:30

西山と2人でボッカ。昨日はC 1 まで5時間かかったが今日は3時間。帰り、今日C 1 入りする森田と須田とすれ違う。午後、リエゾンオフィサーとコックは、近くのペチュス村の温泉に出かける。

8月25日(水)

B. C. 10:15 - C 1 1:40/3:00 - B. C. 4:30

西山とボッカ。27~28kg の荷物、やはり 30kg 近くなると体にこたえる。リエゾンオフィサーが同行。森田と須田はフィックスを 100m 張ったとのこと。



ヒンズー・ラジ山脈の盟主コヨ・ゾム峰(6,872m)

8月26日(木)

B. C. 9:45 - C 1 12:00/2:30 - B. C. 3:50

コックと国境警察官が同行すると言うので荷物を 10kg ずつ持って貰う。C 1 に着くと、森田と須田は沈殿。昨日から森田は高度障害で頭痛と腹の調子が良くない。

8月27日(金) 快晴 沈殿

西山と湖に行く。この3~4日食べ放題なので2人とも下腹が出てきた。こんな贅沢ができるのも今日が最後。

8月28日(土)

B. C. 11:00 - C 1 1:40

朝3時頃から鶏が「オッキロー！」と鳴いている。5羽の鶏も、今度B. C. に戻ってくる時に何羽残っているか。2人ともバテバテでC 1 着。森田と須田はC 2 候補地の偵察を兼ねてボッカ。C 1 で久しぶりに4人が集まり、夜遅くまで話し込む。

8月29日(日)

C 1 10:10 - C 2 3:00

西山と2人でC 2 候補地に向かう。森田と須田はC 2 までボッカ。アイスフォール帯で久しぶりにアイゼンを装着、アンザイレン。標高 4,700m の氷河上にC 2 建設後、森田と須田はC 1 に戻る。午後、少し雪が舞う。

8月30日(月)

気温 0~25° C 快晴 C 2 9:00 - 5,300m地点 1:00/1:30 - C 2 3:40

夜通し氷の崩れる音や落石の音が響く。2日前から下痢気味、高度の影響。西山と ツイ I 峰東側の偵察に出かける。コタルカシュ氷河を南に向かって遡り、コヨ・ゾム峰とツイ I 峰の鞍部の源頭部を目指す。クレバスがありアンザイレン。所々、大きく開いたクレバスがあり迂回を強いられる。昼近く、西山が不調を訴え始める。昼食を全然食わず、眠気も訴える。1 時まで登高を続けることにする。1 時になり休憩、西山はくずれるように眠り込んでしまった。頭痛を訴える。一人で登高を続けるが10分位で大きなクレバスに突き当たり、引き返す。下りの何でもないところで西山がスリップ。高度の影響。トランシーバー交信中、足元の1メートル先で不気味な音をたてながら氷の亀裂ができる。C 2 が見える頃、西山が嘔吐する。森田と須田が待っていて、結局4人でC 2 に泊まることになる。

8月31日(火)

-4~+25° C at C 2 快晴 C 2 10:35 - 5100m地点
1:00 - C 2 3:20

須田と西山はC 1 に下る。森田とツイ I 峰北側の偵察に出かける。北東稜のマイナーピーク手前でコタルカシュ氷河左岸に西から合流する氷河を試登する。アイスフォール帯の中、大きなクレバスに突き当たり進退窮まる。アップザイレンを6回繰り返した後、C 2 に戻る。夜、空は濃さを増し、月は一段と明るさを増し、ツイ I 峰は相変わらず高く聳えている。氷河の動く音や氷河上を流れる水の音、落石の音が絶えず響き渡る。



マイナーピーク

9月1日(水)

-4° C at C 2 快晴 C 2 9:50 - 5,500m地点 2:30/2:45 - C 2 5:00

再度、森田とツイ I 峰東側の偵察に出かける。一昨日、西山と歩いたコタルカシュ氷河源頭部の更に上部。ツイ I 峰の頂上から南に延びる尾根があり、尾根の南東面は岩と雪・氷の巨大な壁。雪崩が予想される。北東稜の東面も落石が多く、いずれも登攀ルートとしては不適切と判断する。今日の最高到達点からは、北に向かって流れ下るコタルカシュ氷河のうねり、その先、ヤルフン河対岸にヒンズー・クシュ山脈が見える。C 2 に戻ると須田と西山が上がって来ている。西山の体調は回復しておらず、夕食の準備中に何度もテントの外に顔を出し嘔吐する。

9月2日(木)

-2~22° C C 2 11:10 - C 3 4:15

森田とツイ I 峰北側をルート開拓。一昨日、偵察したコタルカシュ氷河左岸に西から合流する氷河を更に登る。クレバス帯とアイスフォールを避ける為に左岸サイドモレーン通過を余儀なくされるが何とか氷河の源頭部に達する。南側はツイ I 峰の巨大な北西壁、西と北側は小さなピーク群に囲まれた盆地状、東方は開けていてコヨ・ゾム峰が見える。昨日の偵察で森田と5,500m近くまで登っているの2人とも調子が良い。今日の前半は西山、後半は須田



登攀ルート

がかなり遅れていた。2人とも高度の影響。雪崩を避ける為、北西壁の基部から少し離れた標高 5,300m にC3の場所を決めると、森田と西山はC2に下って行く。須田と2人でC3建設中、北西壁で小さな雪崩が起こる。標高が高くなり、低温でテントの内側一面に霜が付いている。夜、雪崩の音が2回大きく響き渡る。氷河の崩れる音も度々聞こえる。

9月 3日(金)

-3~+23° C C3 9:50 - 5,700m地点 1:30 - C3 4:30

C3は高所にあるが東側が開けているので6時頃から陽が当たり暖かい。外に出ると数ヶ所に真新しいデブリがあり、一つはテントにかなり近い。須田とルート開拓。北西壁に向かって一番左の北稜に取り付く。最初の2ピッチは何でもない雪稜、3ピッチ目からかなり急になる。雪は氷のように硬くなり、所々、完全なブルーアイス。7ピッチ目までは傾斜が増し、2本のツァッケが辛うじて氷に食い込む。更に4~5ピッチ登る。120mフィックスを張る。



C3からツイI峰北西壁

9月 4日(土)

沈殿、逆ボッカ。朝遅く起き、食事を終えて出発の準備。気が付くと10時過ぎ。2人とも昨日の疲れが残りに、だるいので沈殿とする。C2から上がって来る森田と西山のサポート、逆ボッカに出かける。二人用テントに4人が泊り、かなり狭い。風が強く、雲も出てくる。夜、降雪。

9月 5日(日)

-8~25° C at C3 曇り一時晴れ C3 9:50 - 5,700m 地点 3:30 - C3 5:25

朝、2cmの積雪。須田と二人で、一昨日の最高到達点付近の幅15m位の氷のルンゼにフィックスを張りに行く。夕方、森田が頭痛を訴える。夕食後、直ぐに寝てしまう。

9月 6日(月)

曇り一時雪 C3 9:40 - C4 12:10/12:40 - 最高点 4:15 - C4 5:30

須田とルート開拓の為に先行する。C4からはブルーアイスのルンゼをトラバース気味に下る。最後のスラブ状の凹角が嫌らしい。気温が下がり寒い。C4は、ポール付きのツェルト。標高約5,600m、夜、雪崩の音が3~4回響く。

9月 7日(火)

-9° C at C4 曇りのち晴れ C4 11:20 - 5,750m地点 2:50/3:00 - C3 5:25

降雪がツェルトに当たる音と雪崩の音、寒さで眠れない。1ピッチ目、青氷のルンゼをアップザイレン。4ピッチ目、難しい箇所はないが大きな浮石がありいやらしい。5ピッチ目大きなテラスに出る。時間も遅くなり下る。C4に戻ると森田と西山が頭痛を訴える。C4には森田と須田が残る。西山と2人でC3に下る。燃料が豊富にあるのでココアやコンソメ、お茶など水分を大量に摂取。

9月 8日(水)

-11° C at C3 C3 11:10 - C4 1:45/2:15 - C3 3:00

昨夜は雲が多く、星も3～4個しか見えなかったが今朝は快晴。久し振りのボッカ、荷物約10kg。C4に着くと須田が4ピッチ目を登っている。風が少し出てきたので急いでC3に下る。温度計は-3°C、寒い筈だ。深夜、大きな雪崩の音が一発聞こえる。

9月9日(木)

快晴 C3 11:15 - C2 12:45/2:15 - C1 4:20/4:40 - B.C. 6:20

北西壁の中央左寄りに雪崩れた跡が見える。快晴。好天の周期に入っらしい。しかし日毎に風は冷たくなり秋の気配がする。上の二人がアタックでビバーク予定。西山と2人、サポートでC4に上がるだけなのでゆっくりする。10時の交信で今日中に全員B.C.に下ることになる。C2で4人合流。C1付近では暖かく感じる。途中、サイドモレーンが通れず氷河上に戻るが、クレバスがズタズタに開き、迂回を余儀なくされて時間がかかる。活動を開始した当初はサイドモレーンに咲いていた赤や白の花も今は枯れ始めている。”Welcome!”の連発でリエゾンオフィサーが迎えてくれるが。勝手にB.C.を移動したことで森田と口論になる。久し振りにコックのマトン入りカレー。久し振りにカセットを聴く。暖かい夜も久し振り。吐き気がするまで食べるのも久し振り。B.C.で沢山の久し振りに囲まれる。今日、西山は元気なく、缶詰とカレーだけ。代わりに須田の食欲が凄い。夜、食べ過ぎ。消化剤も飲めない。吐き気がするので外で寝る。ツイI峰が夜空にくっきりと浮かび上がっている。

9月10日(金)

晴れのち曇り

朝起きるとお腹が一杯なので、まず消化剤を服用。一日中、食べ続ける。夕食後、消化剤を服用するのに苦労する。それでも夜食にラーメン。シュラフに入ってもまだお腹が一杯。

9月11日(土)

晴れのち小雪のちガス

朝食後1時間も経たないのに他の3人は料理を始める。前のB.C.には鶏が5～6羽いたが、今は3羽だけ。一羽はトサカが真っ赤で胴体は茶色に赤を混ぜたような色。頭から尾まで艶がよく、3羽の中で一番元気。朝「オッキロー！」と鳴いているのもこの一羽らしい。一番美味しそうだ。午前中は食べ通し。昼から森田と須田とリエゾンオフィサーとまたトランプをする。トランプやカセットも飽きた。ただ食べる事だけは飽きない。

9月12日(日)

曇りのち雪

昨夜は雪。B.C.の周囲は2cmの積雪。朝から食べ続ける。昨夕、ラーメンとうどんを食べただけなのでお腹の調子はすごく良い。朝、イチュプン村の子供が2人来ているので、クッキーとアメ、チョコレートをあげる。コタルカシュ氷河の上流はガスでツイI峰も見えない。昼食後、パッキングを終えて出発するが100mも歩かない中に、食器やポリタン、料理道具を一切忘れていないことに気付き、やる気を失くしてB.C.に戻る。今日も沈殿となる。一人でサイドモレーンを散歩する。放し飼いの馬5～6頭とすれ違う。夕方、また降雪。B.C.は底冷え、非常に寒い。

9月13日(月)

快晴 B.C. 10:20 - C1 1:45/2:10 - デボ地 2:30/3:00 - 右岸最高到達点 4:50
- C1 5:50

モルゲンロートでツイ I 峰が赤く染まっている。B. C. 出発。トップの西山がものすごいスピードで歩き始める。休養の後で皆快調。C 1 に着く頃、西山の元気が無い。C 1 の周囲は 12~13cm の積雪。昼食後、4 人でデポしてあるアイゼンやバイルなどを回収に行く。須田と西山はフィックスを回収。森田と 2 人でコタルカシュ氷河の右岸まで偵察。4 人が入ると C 1 は狭い。夜、快晴で星空。

9 月 14 日(火)

晴れ 一時小雪

氷河の状態が悪くなっており右岸寄りを登る。C 2 の近くで水たまりの上に薄氷、その上に積雪があり、4 人とも水たまりの中を進む。C 2 の周囲は 17~18cm の積雪。

9 月 15 日(水)

快晴のち曇りのち晴れ C 2 10:05 - C 3 4:35

C 2 から最初は氷河の上、次にアイスフォールを避けてサイドモレーン、最後に氷河の上を歩く。C 3 の手前でヒドンクレバスに落ちそうになり、腰まで落ちる。今日は森田の誕生日。

9 月 16 日(木)

晴れ一時小雪 C 3 12:45 - C 4 6:25(先発隊) 6:55(後発隊)

アイゼンを直したりして時間がかかる。昼食後 C 3 を出発。西山と 2 人で先行、11mm のザイルが非常に重く感じられる。C 4 に到着。30 分遅れて後発隊が到着。須田の足が調子悪いのかバテバテ。

《 アタック 》

9 月 17 日(金)

雪 時々 晴れ C 4 9:30 - 4 ピッチ目(5,700m) 16:30

3 日分の食料を用意してアタックに出発。須田、豊田、西山、森田の順に 3 本のザイルを結び合う。トップを須田と 2 人で交代しながら登る。十分なスペースが見つからず 2 組に分かれてビバーク。須田と西山は底つきのツェルトで横になれる。こちらは岩に座ってツェルトを被るだけ、腰掛けられるがスタンスが狭く、ウトウトすると両足が外れる。森田は、両足のスタンスはしっかりしているが浅く腰掛けているだけ。夜通し、2 人とも何回も座り直す。宵の口に少し風と雪。

9 月 18 日(土)

晴れのち雪 ビバーク地 9:30 - 5 ピッチ目 10:30/12:00 - ビバーク地 4:00

今日は森田と 2 人でトップを交代しながら登る。1 ピッチ登った所で西山が不調を訴える。手の指が凍傷のようで森田が付き添って C 3 に下る。須田と 2 人でアタック続行。前回の最高到達点(10 ピッチ目)に達して、須田がトップで行くがスラブ気味の所で行き詰まり、トップを交代する。ビレー点から右に 5~6 m トラバースして直上するがまたスラブに突き当たる。時間もかなり遅いのでビバークの準備に取り掛かる。昨夜は殆ど眠れなかったが、今日は整地が十分で、胡坐をかけるので快適。今日は一日中雪。天候は悪化している。

9 月 19 日(日)

雪 ビバーク地 9:30 - C 4 12:00 - C 3 2:35

朝、マッチがつかずに硫黄の匂いがツェルトの中に充満して苦しい。雪が止む様子がないので下ることにする。7~8 ピッチ下った所で頭が痛くなる。C 3 に下り、頭痛薬が無いので精

神安定剤を服用すると頭痛が治り、夕食も問題なく食べれる。2日間のビバークの後なのでC3の小さいテントも快適。夕食後、横になって話していると4人ともシュラフも使わず寝てしまう。西山の元気がない。

《 最終アタック 》

9月20日(月)

雪のち 晴れ 沈殿

今朝も雪、昨日から40cm近い積雪。一日中、森田と水を作る。須田と西山は昨日から寝っぱなし。昼食後、雪が止み、10分位晴れ間が見える。陽の光は抜群に暖かい。岩と雪・氷がミックスした北稜もこの2～3日の雪で真っ白。午後3時頃から晴れ、夜は星空。

9月21日(火)

雪時々晴れ C3 10:15 - C4 2:30

森田と第二次アタック。朝5時半に起きるが、シュラフを干したりココアを飲んだりして気が付くと10時過ぎている。歩き始めると靴が凍っている。春合宿でやられた左足の薬指が凍っている。太陽が出て暖かいが、時には腰以上のラッセルで全身びしょ濡れ。C4には意外と早く着く。C4のツェルトを整理すると嬉しいことに食料が3～4日分出てくる。昼食抜きで行動していたのでアルファーマをお茶漬けで食べる。夜、かなり冷え込む。 -20°C 位。

9月22日(水)

晴れのち曇り C4 10:10 - 5,900m地点(C5) 2:45/3:45 - C5 5:15

朝7時起床。今、森田が食当をしてくれている。風の音がするが快晴。全てが凍てつく寒さ。岩陰にあるC4は朝陽が当たらず寒い。C5に着く頃、風が出てくる。荷物を置いてルートを延ばしに行く。2ピッチ。トップの森田がスラブでかなり苦戦している。ボルト2本、ハーケン1本、ボルト1本を打ち、35m位伸ばした所で、天気も悪くなってきたのでC5に下る。ポールを使用したC5は、食料もC4から沢山上げてあるので、快適なビバーク。夜、東方に星が見えるが北方はいやらしい雲がかかっている。

9月23日(木)

曇り時々小雪 C5 11:00 - C6 7:20 7ピッチ

疲れた。

9月24日(金)

曇り 時々 晴れ C6 10:05 - C7 5:00 4ピッチ

C6からの1ピッチ目は昨日アップザイレした所、残置のザイルもあり楽。2ピッチ目で雪稜から岩稜に移る、その間が急な青氷。岩稜もスラブで悪い。その後の2ピッチは落石が多い。曇天だが、時々陽が差して暖かい。高度の影響か体の調子が良くない。

9月25日(土)

曇りのち雪 C7 10:00 - 最高到達点 6,300m 12:00-12:30 - C4 6:40

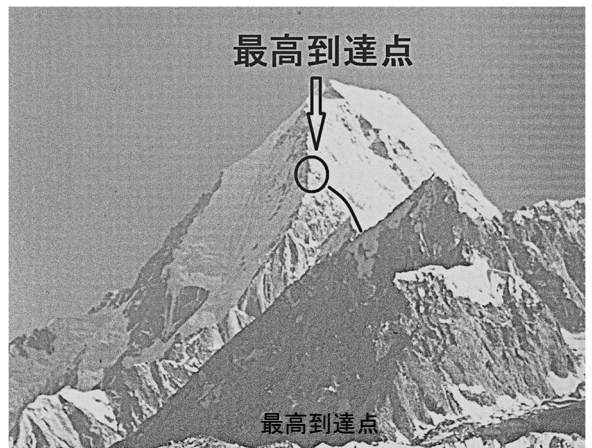
(注：朝起きてから退却までの日記の記載は次の2行だけ)

朝起きると体全体がだるい。疲れが全然取れていない。1ピッチ登った所で撤退。

(注：森田の報告書にある通り、「もうダメだ」、「高度にやられた」、「頭痛が…」と伝える。森田はまだ余裕があるようだが、トップの森田に追いつくのに倍の時間がかかる私の緩慢な動作を見ていて登攀続行は危険と判断したようだ)

アップザイレンを繰り返し、フィックス部分、核心部が終ったので休憩。面倒くさいので、ダブルで使用していた 40m ザイルを一本に結んで

80m の間隔でスタック。森田に声を掛けて歩き始める。50～60m 進むと雪・氷が落ちてくる音。雪面にピッケルを打ち込み、前傾姿勢。振り向くと流れ落ちる雪と氷で森田の姿が見えない。雪崩が収まり森田の姿を見てホッとする。あのままダブルでアップザイレンしていたら雪崩に巻き込まれていた。C 4 にはガスと食料がかなりあり 5～6 回戦食べる。最初に飲んだ味噌汁は旨かった。



9月 26 日(日)

曇りのち雪 C 4 11:00 - C 2 4:45 - ビバーク地 7:30

朝起きると森田がメタの空焚きをしている。C 4 を出発、最初のクレバスを渡る時、氷が崩れて腰まで落ち込む。フィックスが終ってから C 3 までは長く感じる。C 3 から C 2 までは須田と西山の踏み跡があり楽。クレバスで所々、迂回を強いられる。C 2 手前で 4 人全員揃う。暗くなってもいいからイチュプン村まで行こうと 4 人の意見が一致する。氷河上で須田がズッコケて膝を痛める。C 1 手前、氷河の中でビバーク。

9月 27 日(月)

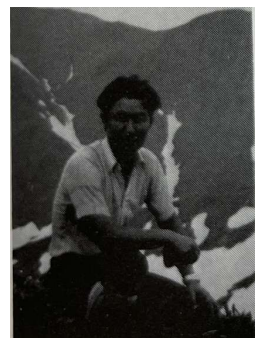
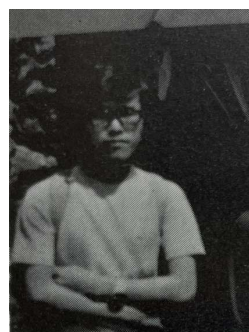
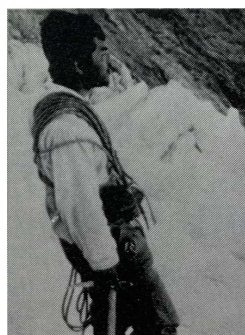
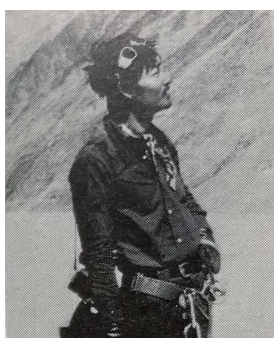
曇り ビバーク地 9:40 - C1 9:50 - イチュプン村 2:00

朝、陽が照り始めてから起きだす。昨日までとはうって変わって暖かい。食料は何も無いので早々に出発。すぐにポーター 2 人と出会う。チャパティを貰う。荷物をポーターに預けて空身で下る。B.C. に着くと暑い位で、もう昨日までのビバークのあの寒さが懐かしい。B.C. を撤収し、ゴミを燃やす。ツイ I 峰を指さして、ポーター達に名を尋ねるとチャティール・ゾム Chatir Zom(テントの形をした山の意)とのこと。イチュプンの村に着くとコックが、次にリエゾンオフィサーが出迎えてくれる。我々が登頂に成功したものと思っただけで大喜びしている。村に着いてから寝るまで食べ続ける。

<< あとがき >>

当時の日記を読み返すと、4 人がこんなにも高度障害、食料不足、悪天候に悩まされ、またヒドンクレバスに落ちそうになったり、危うく雪崩に巻き込まれそうになったり、わずかのところで危機を回避している。

機会があれば、ツイ I 峰遠征の準備、キャラバン、下山後の思い出、また南米アンデス登山の思い出を書いてみようと思う。



【お知らせ】

秋のOB合宿は、なななんと究極の女将が経営する

北ア松本の最高級 金宇館を全館貸し切り！

稲門山の会の2025年OB合宿については、次のとおり開催いたします。

- ① 日 時：2025年11月10日(月)～11日(火) 募集人員 10～15名
- ② 会 場：信州美ヶ原温泉 旅館 金宇館/かなうかん
〒390-0221 長野県松本市里山辺 131-2
TEL0263-32-1922 <https://kanaukan.com/>
- ③ ツアー：要望あれば、観光タクシーツアーを催行
- ④ 申込み先：行方正幸 yukuemnamekata@gmail.com
Tel:080-3701-3421



【編集後記】

半年前の1月にドナルド・トランプが米国の大統領になってから世界中に暴力が蔓延し、政治経済が激震で揺れています。もう、「民主主義」「恒久平和」「自由経済」人類が共通の目標としていた夢が全て不確実になり、脅しと強欲な取引で物事を解決しようとするファシズムの足音が近づいていると感じるのは私だけでしょうか。半世紀前ならこのような動きがでると「No!」という大きな動きが起きていたと思うのだが……。社会が一度分断され、不寛容が蔓延すると行き着くところまで行って悲劇が起きるまで收拾がつかないというのが歴史の教訓。

さて、ボヤきはこれくらいにして、稲山通信第51号の【特集記事1】は2月に開催された、稲門山の会の総会・新年会の報告です。例年に比し出席者はちょっと寂しいけど内容には濃いものがありました。さらなるOBの皆さんの参加をお願いします。2年目の村田執行部、SNSを使った山の会のIT化や現役とOBの合同ハイキングなど新しいイベントに取り組んでいます。多くの会員のイベント参加よろしくお願いします。

次に、特集2は「低山」。村田OBから高尾山、三宅OBから塩の山、宮澤OBから鎌倉散策20年を投稿していただきました。その他にも海崎OBのキナバル、齋藤壮呉OBのGWの富士山、特別寄稿の豊田OBのヒンズー・ラジ Thui I 峰への挑戦など第51号も読みどころ満載です。

ひとつお詫びがあります。第50号の編集後記に岳人列伝⑩の記述で「松濤明」の記載漏れがあったことをお詫びします。

さて、第52号の特集は「山の本」です。会員の皆さんが出版した山の本があればご紹介したいので、次の住所までお送り下さい。また、レビューファ、テレイ、ボナッティーなど登山家の本の感想などの投稿お待ちしております。では私の漢詩をひとつ。

〒285-0807 千葉県佐倉市山王 2-39-3 行方正幸

E-mail:yukuemnamekata@gmail.com

天	雪	穂	涸	早
幕	溪	高	沢	春
人	微	岳	満	穂
影	風	独	天	高
揺	起	登	星	行